

# 牛女

小川未明

青空文庫



ある村に、脊の高い、大きな女がありました。あまり大きいので、くびを垂れて歩きました。その女は、おしでありました。性質は、いたってやさしく、涙もろくて、よく、一人の子供をかわいがりました。

女は、いつも黒いような着物をきていました。ただ子供と二人ぎりでありました。まだ年のいかないうちの子供の手を引いて、道歩いているのを、村の人はよく見たのであります。そして、大女でやさしいところから、だれがいったものか「牛女」と名づけたのであります。

村の子供らは、この女が通ると、「牛女」が通ったといっ

て、珍しいものでも見るように、みんなして、後ろについていて、いろいろのことをいいはやしましたけれど、女はおしで、耳が聞こえませんかから、黙って、いつものように下を向いて、のそりのそりと歩いてゆくようすが、いかにもかわいそうであつたのであります。

牛女は、自分の子供をかわいがることは、一通りでありませんでした。自分が不具者だということも、子供が、不具者の子だから、みんなにばかにされるのだらうということも、父親がないから、ほかにだれも子供を育ててくれるものがないということも、よく知っていました。

それですから、いつそう子供に対する不憫がまじるとみえて、

子供こどもをかわいがったのであります。

子供こどもは男の子で、母親ははおやを慕したいました。そして、母親ははおやのゆく

ところへは、どこへでもついてゆきました。

牛うしおんな女おおおんなは、大女ちからで、力ちからも、またほかの人ひとたちよりは、幾い

倍くばいもありましたうえに、性質せいしつが、やさしくあつたから、人ひと

々とは、牛うしおんな女ちからしごとに力仕事ちからしごとを頼たのみました。たきぎをしよつたり、

石いしを運はこんだり、また、荷物にもつをかつがしたり、いろいろのことを頼たの

みました。牛うしおんな女はたらは、よく働はたらきました。そして、その金かねで二人ふたり

は、その日ひ、その日ひを暮くらしていました。

こんなに大きおおくて、力ちからの強い牛うしおんな女も、病びょう気きになりました。

どんなものでも、病びょう気きにかからないものはないであります。

しかも、牛女うしおんなの病氣びようきは、なかなか重おもかつたのであります。

そして働はたらくこともできなくなりました。

牛女うしおんなは、自分じぶんは死ぬしのでないかと思おもいました。もし、自分じぶん

が死ぬしようなことがあつたなら、子供こどもをだれが見みてくれようと思おも

いました。そう思おもうと、たとえ死しんでも死しにきれない。自分じぶんの靈たま

魂まは、なにかに化ばけてきても、きつと子供こどもの行ゆく末すえを見守みまもろう

と思おもいました。牛女うしおんなの大きおおなやさしい目めの中なかから、大粒おおつぶの

涙なみだが、ぼとりぼとりと流ながれたのであります。

しかし、運命うんめいには牛女うしおんなも、しかたがなかつたとみえます。

病氣びようきが重おもくなつて、とうとう牛女うしおんなは死しんでしまいました。

村むらの人々ひとびとは、牛女うしおんなをかわいそうに思おもいました。どんなに

置いていった子供のことに心を取らたろうと、だれしも深く察して、牛女をあわれまぬものはなかつたのであります。

人々は寄り集まって、牛女の葬式を出して、墓地にうずめてやりました。そして、後に残った子供を、みんながめんどうを見て育ててやることになりました。

子供は、この家から、かしの家へというふうに移り変わつて、だんだん月日とともに大きくなつていったのであります。しかし、うれしいこと、また、悲しいことがあるにつけて、子供は死んだ母親を恋しく思いました。

村には、春がき、夏がき、秋となり、冬となりました。子供は、だんだん死んだ母親をなつかしく思い、恋しく思うばかりであ

りました。

ある冬の日のこと、子供は、村はずれに立つて、かなたの国境の山々をながめていきますと、大きな山の半腹に、母の姿がはつきりと、真つ白な雪の上に黒く浮き出して見えたのであります。これを見ると、子供はびっくりしました。けれど、このことを口に出してだれにもいいませんでした。

子供は、母親が恋しくなると、村はずれに立つて、かなたの山を見ました。すると、天気の良い晴れた日には、いつでも母親の黒い姿をありありと見ることができたのです。ちようど母親は、黙って、じつとこちらを見つめて、我が子の身の上を見守っているように思われたのであります。



子供は、口に出して、そのことをいいませんでしたが、いつか村人は、ついにこれを見つけました。

「西の山に、牛女が現れた。」と、いいふらしました。そして、みんな外に出て、西の山をながめたのであります。

「きつと、子供のことを思つて、あの山に現れたのだろう。」と、みんなは口々にいいました。子供らは、天気の良い晩方には、西の国境の山の方を見て、

「牛女！ 牛女！」と、口々にいつて、その話でもちきつたのです。

ところが、いつしか春がきて、雪が消えかかると、牛女の姿もだんだんうすくなつていつて、まったく雪が消えてしまふ春

の半なかばごろになると、牛うしおんな女の姿すがたは見みられなくなつてしまつたのです。

しかし、冬ゆふとなつて、雪ゆきが山やまに積つもり里さとに降ふるところになると、

西にしの山やまに、またしても、ありありと牛うしおんな女の黒くろい姿すがたが現あられまし

た。村むらの人々ひとびとや子供こどもらは冬ふゆの間あいだ、牛うしおんな女のうわさでもちきり

ました。そして、牛うしおんな女の残のこしていつた子供こどもは、恋こいしい母ははおや親

の姿すがたを、毎まい日にちのようむらに村むらはずれたに立たつてながめたのであります。

「牛うしおんな女なが、また西にしの山やまに現あられた。あんなに子供こどもの身みの上うえを心

配んぱいしている。かわいそうなものだ。」と、村むら人びとはいつて、そ

の子こども供どものめんどうをよく見みてやつたのす。

やがて春はるがきて、暖あたかになると、牛うしおんな女なの姿すがたは、その雪ゆきと

もに消えてしまつたのであります。

こうして、くる年も、くる年も、西の山に牛女の黒い姿は現れました。そのうちに、子供は大きくなつたものですから、この村から程近い、町のある商家へ、奉公させられることになつたのであります。

子供は、町にいつてからも、西の山を見て恋しい母親の姿をながめました。村の人々は、その子供がいなくなつてからも、雪が降つて、西の山に牛女の姿が現れると、母親と、子供の情合について、語り合つたのであります。

「ああ、牛女の姿があんなにうすくなつたもの、暖かになつたはずだ。」と、しまいには、季節の移り変わりを、牛女に

ついで人々ひとびとはいうようになったのでした。

牛女うしおんなの子供は、ある年としの春はる、西にしの山やまに現あらわれた母親ははおやの許ゆるし

も受けうけずに、かつてにその商家しょうかから飛とび出だして、汽車きしゃに乗のつて、

故郷ふるさとを見捨みすてて、南みなみの方ほうの国くにへいつてしまつたのであります。

村むらの人ひとも、町まちの人ひとも、もうだれも、その子供こどものことについて、

その後のちのことを知しることができませんでした。そのうちに、夏なつも

過すぎ、秋あきも去さつて、冬ふゆとなりました。

やがて、山やまにも、村むらにも、町まちにも、雪ゆきが降ふつて積つまりました。

ただ不思議ふしぎなのは、どうしたことか、今年ことしにかぎつて、西にしの山やまに

牛女うしおんなの姿すがたが見みえないことでありました。

人々ひとびとは、牛女うしおんなの姿すがたが見みえないのをいぶかしがつて、

「子供が、もう町にいなくなつたから、うしおんな牛女は見守る必要ひつようがなくなつたのだらう。」と、語り合あひました。

その冬も、いつしか過ぎて春がきたころであります。町の中まちなかには、まだところどころに雪が消えずに残のこつていました。ある日ひの夜よるのことであります。町の中まちなかを大きな女が、のそりのそりと歩あるいていました。それを見た人々ひとびとは、びつくりしました。まさしく、それは牛女うしおんなであつたからであります。

どうして牛女うしおんなが、どこからきたものかと、みんなは語り合あひました。人々ひとびとはその後のちもたびたび真夜中まよなかに、牛女うしおんながさびしそくに町の中まちなかを歩あるいている姿すがたを見たのであります。

「きつと牛女うしおんなは、子供が故郷こきようから出でていつてしまったのを知し

らないのだらう。それで、この町の<sup>まち</sup>中<sup>なか</sup>を<sup>ある</sup>歩いて、子供<sup>こども</sup>を探<sup>さが</sup>しているの<sup>こと</sup>に<sup>さ</sup>ちがいない。「と、人々<sup>ひとびと</sup>はいいました。

雪<sup>ゆき</sup>が<sup>ま</sup>つた<sup>く</sup>消<sup>き</sup>えて、町<sup>まち</sup>の中<sup>なか</sup>には<sup>あと</sup>跡<sup>あと</sup>をも<sup>と</sup>止<sup>と</sup>め<sup>め</sup>なくな<sup>な</sup>りました。木々<sup>きぎ</sup>は、みんな<sup>ぎんいろ</sup>銀<sup>ぎん</sup>色<sup>いろ</sup>の<sup>め</sup>芽<sup>め</sup>を<sup>ふ</sup>いて、夜<sup>よる</sup>もう<sup>あか</sup>す<sup>あ</sup>明<sup>あ</sup>る<sup>か</sup>くて<sup>き</sup>いい<sup>せつ</sup>季<sup>せつ</sup>節<sup>つ</sup>となり<sup>な</sup>りました。

ある<sup>よ</sup>夜<sup>ひと</sup>、人<sup>ひと</sup>は<sup>うしおんな</sup>牛<sup>うしおんな</sup>女<sup>な</sup>が<sup>まち</sup>町<sup>まち</sup>の<sup>くら</sup>暗<sup>くら</sup>い<sup>ろじ</sup>路<sup>ろじ</sup>次<sup>じ</sup>に<sup>た</sup>立<sup>た</sup>つて、<sup>さ</sup>さ<sup>め</sup>ぎ<sup>め</sup>と<sup>な</sup>泣<sup>な</sup>いているの<sup>こと</sup>を<sup>み</sup>見<sup>み</sup>た<sup>こと</sup>とい<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>。しか<sup>し</sup>そ<sup>の</sup>後<sup>のち</sup>、<sup>だ</sup>れ<sup>ひ</sup>と<sup>り</sup>、<sup>ま</sup>た<sup>うしおんな</sup>牛<sup>うしおんな</sup>女<sup>な</sup>の<sup>み</sup>姿<sup>すがた</sup>を<sup>み</sup>見<sup>み</sup>た<sup>こと</sup>が<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。牛<sup>うしおんな</sup>女<sup>な</sup>は<sup>ど</sup>う<sup>し</sup>た<sup>こ</sup>と<sup>か</sup>、<sup>も</sup>は<sup>や</sup>こ<sup>の</sup>町<sup>まち</sup>には<sup>お</sup>ら<sup>な</sup>か<sup>つ</sup>た<sup>こ</sup>と<sup>です</sup>。

その<sup>とし</sup>年<sup>らい</sup>以<sup>ふ</sup>来<sup>ゆ</sup>、<sup>ふ</sup>冬<sup>ゆ</sup>にな<sup>つ</sup>ても、<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>び<sup>や</sup>山<sup>ま</sup>には<sup>うしおんな</sup>牛<sup>うしおんな</sup>女<sup>な</sup>の<sup>くろ</sup>黒<sup>くろ</sup>い<sup>すがた</sup>姿<sup>すがた</sup>は<sup>み</sup>見<sup>み</sup>え<sup>な</sup>か<sup>つ</sup>た<sup>こ</sup>と<sup>で</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>。

うしおんな 牛女の子供は、南の方の雪の降らない国へ行って、そこで  
 いっしょうけんめいに働きました。そして、かなりの金持ちとな  
 りました。そうすると、自分の生まれた国がなつかしくなつたの  
 であります。国へ帰つても、母親もなければ、兄弟もあり  
 ませんけれど、子供の時分に自分を育ててくれたしんせつな人  
 々がありました。彼は、その人たちや、村のことを思い出しま  
 した。その人たちに対して、お礼をいわなければならぬと思いま  
 した。

こども 子供は、たくさんの土産物と、お金とを持って、はるばると  
 こきよう 故郷に帰つてきたのであります。そして、村の人々に厚くお  
 れいもう 礼を申しました。村の人たちは、牛女の子供が出世をした

の喜び、祝いました。

牛女の子供は、なにか、自分は何事業をしなければならぬと考えました。そこで村に広い地面を買つて、たくさんのりんごの木を植えました。大きいいりんごの実を結ばして、それを諸国に出そうとしたのであります。

彼は、多くの人を雇つて、木に肥料をやつたり、冬になると圃いをして、雪のために折れないように手をかけたりしました。

そのうちに木はだんだん大きく伸びて、ある年の春には、広い畑一面に、さながら雪の降つたように、りんごの花が咲きました。

太陽は終日、花の上を明るく照らして、みつばちは、朝から日の暮れるまで、花の中をうなりつづけていました。



初夏しよかのころには、青あおい、小ちいさな実みが鈴すず生なりになりました。そして、その実みがだんだん大おおきくなりかけた時じ分ぶんに、一じ時むしに虫むしがついて、畑はたげんたい全ぜん体たいにりんごの実みが落おちてしまいました。

明あくる年としも、その明あくる年としも、同おなじように、りんごの実みは落おちてしまいました。それはなんとなく、子し細さいのあるらしいことでありました。村むらのもののわかつたじいさんは、牛うしおんな女なの子こ供どもに向むかつて、

「なにかのたたりかもしれない。おまえさんには、心こころあたりになるようなことはないかな。」と、あるとき、聞ききました。牛うしおんな女なの子こ供どもは、そのときは、なにもそれについて思おもい出だすことはありませんでした。

しかし、彼は独りとなつて、静かに考えたとき、自分は町から出て、遠方へいつた時分にも、母親の靈魂に無断であつたことを思いました。また、故郷へ歸つてきてからも、母親のお墓におまいりをしたばかりで、まだ法事も営まなかつたことを思い出しました。

あれほど、母親は、自分をかわいがつてくれたのに、そして、死んでからもああして自分の身の上を守つてくれたのに、自分はそのれに対して、あまり冷淡であつたことに、心づきました。きつと、これは母の怒りであろうと思ひましたから、子供は、懇ろに母親の靈魂を弔つて、坊さん呼び、村の人々を呼び、真心をこめて母親の法事を営んだのであります。

明くる年の春、またりんごの花は真つ白に雪のごとく咲きました。そして、夏には、青々と実りました。毎年このころになると、悪い虫がつくのでありましたから、今年は、どうか満足に実を結ばせたいと思ひました。

すると、その年の夏の日暮れ方のことでもあります。どこからとなく、たくさんのこうもりが飛んできて、毎晩のようにりんご畑の上を飛びまわつて、悪い虫をみんな食べたのであります。その中に、一ぴき大きなこうもりがありました。その大きなこうもりは、ちようど女王のように、ほかのこうもりを率いているごとく、見えました。月が円く、東の空から上る晩も、また、黒雲が出て外の真つ暗な晩も、こうもりは、りんご畑の上を飛び

まわりました。その年は、りんごに虫がつかずよく実つて、予想したよりも、多くの収穫があつたのであります。村の人々は、たがいに語らいました。

「牛女が、こうもりになつてきて、子供の身の上を守るんだ。」と、そのやさしい、情の深い、心根を哀れに思つたのであります。

また、つぎの、つぎの年も、夏になると、一ぴきの大きなこうもりが、多くのこうもりを率いてきて、りんご畑の上を毎晩のように飛びまわりました。そして、りんごには、おかげで悪い虫がつかずによく実りました。

こうして、それから四、五年の後には、牛女の子供は、こ

の<sup>ちほう</sup>地方での<sup>こうふく</sup>幸福な<sup>み</sup>身の上の<sup>うえ</sup>上の<sup>しやう</sup>百姓となつたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年5月

※表題は底本では、「牛女《うしおんな》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年1月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 牛女

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>